

病害虫発生予察地区報 第 1 号

—— 病害虫情報 ——

病害虫名 クビアカツヤカミキリ

1 情報の内容

佐久地域でクビアカツヤカミキリが繁殖をしていることを示す痕跡が確認され、発生域が拡大する恐れがあることから、当該地域の栽培者はすみやかにほ場を点検し、状況に応じて防除対策を実施する。

2 対象地域

佐久地域のもも、すもも（日本すもも、プルーン）、うめ等の核果類果樹園

3 根拠

- (1) 今年の 8 月以降、佐久地域の複数のもも、すもも（日本すもも、プルーン）の果樹園、庭先のうめ等の果樹において、クビアカツヤカミキリの成虫およびクビアカツヤカミキリの幼虫が排出するフンと木くずの混合物（以下「フラス」という）が多数確認された（表 1）。今後も新たな確認が続く可能性が高い。
- (2) 本種が定着し、発生が続くことで、樹体が衰弱、枯死することが懸念される。

表 1 クビアカツヤカミキリが確認された樹園地

8/21時点			
市町村名	品目	成虫確認 ほ場数	フラス確 認ほ場数
佐久市	もも	0	1
佐久市（旧臼田町）	もも	0	1
	プルーン	0	2
佐久穂町	もも	1	4
	日本すもも	2	10
	プルーン	1	13

4 防除対策

- ・本種の形態については、病虫害発生予察特殊報第1号（令和8年8月13日発表）を参照する（<https://www.pref.nagano.lg.jp/bojo/joho/byogaichu/yosatsu>）。長野県内の生態は明らかではないが、一般的に本種の生活環は図1のとおりである。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12～3月
1年目			卵→幼虫			フラス排出		活動休止	
2年目			フラス排出（蛹室をつくる）						蛹室に入りフラスを出さない(休止)
3年目	蛹		羽化脱出						

※：代表的な2年1化の場合であり、1年1化や3年1化の個体もいるとされる

図1 クビアカツヤカミキリの生活環（模式図）

一般的な防除対策は下記のとおりである。

（1）耕種的防除

ア 成虫を見つけた場合は捕殺する

イ 疑わしいフラスを発見した場合は、食入孔を確認し、針金や千枚通し等で中の幼虫を刺殺する。また卵は肉眼では識別しづらいが、ブラックライト（UVライト）を当てると卵が光るため発見しやすい。

ウ 成虫の拡散と樹皮への新たな産卵を防ぐため、被害部を0.3mm目合いの白色防虫ネットや白色防草シートですきまができないようしっかり覆い、粘着テープなどで端もとめる。

エ 被害が大きい場合や、被害樹が高樹齢の場合は伐倒する。その場合できるだけ根元に近い部分から伐採する。なお、伐倒木はキルパー40を処理・被覆し、14日間以上燻蒸する。処理が困難な場合は、伐倒木を速やかに焼却・破砕によって処分する。移送時には成虫が拡散しないように被覆する。また、根株は伐根して同様の処理を行うか、出来ない場合は防虫ネットで地上部を覆い、成虫の飛散を防止するとともに、羽化した成虫を確認した場合は速やかに捕殺する。

オ 予防的措置として、被害がない樹体に対しても0.3mm目合いの白色防虫ネットで樹を覆ったり、根巻テープを処理することで成虫の着生や産卵を阻止できる。

カ 蒸れによる病害の発生を予防するために、9月に入り成虫の羽化や産卵の可能性がなくなったら、すみやかに被覆を除去することが望ましい。

（2）化学的防除

本種を対象とした登録農薬があるので、登録内容を確認して使用する。また、カミキリムシ類を対象とした農薬も使用できる。食入孔から注入する農薬を使用する場合は、出来るだけフラスを取り除いたうえで、ノズルを深く差し込み、薬液を注入する

令和8年8月28日現在で利用できる主な農薬を表2～4に記載する。

表2 クビアカツヤカミキリに登録のある殺虫剤（使用方法が散布のもの）

8/5更新 JPPネット 確認

作物名	系統	薬剤名	IRACコード	希釈倍数	使用基準※	使用回数
もも	有機リン剤	スミチオン乳剤	1	1,000倍	3日※ ¹	5回以内
	カーバメート剤	オリオン水和剤40	1	1,000倍	14日※ ¹	2回以内
	合成ピレスロイド剤	アグロスリン水和剤	3	1,000倍	前日	5回以内
	ネオニコチノイド剤	アクタラ顆粒水溶剤	4	2,000倍	前日	3回以内
		ダントツ水溶剤	4	2,000倍	7日	3回以内
		モスピラン顆粒水溶剤	3	2,000倍	前日	3回以内
	その他	アクセルフロアブル	22	1,000倍	前日	2回以内
		ハチハチフロアブル	21	1000～2000	前日※ ²	2回以内
		パダンSG水溶剤	14	1,500倍	14日	3回以内
すもも (日本すもも プルーン)	合成ピレスロイド剤	アグロスリン水和剤	3	1,000倍	前日	2回以内
	ネオニコチノイド剤	ダントツ水溶剤	4	2,000倍	3日	3回以内
		モスピラン顆粒水溶剤	3	2,000倍	前日	3回以内
	その他	アクセルフロアブル	22	1,000倍	前日	2回以内
		パダンSG水溶剤	14	1,500倍	14日	3回以内
うめ	有機リン剤	スミチオン乳剤	1	1,000倍	14日※ ¹	2回以内
	カーバメート剤	オリオン水和剤40	1	1,000倍	7日※ ¹	3回以内
	合成ピレスロイド剤	アグロスリン水和剤	3	2,000倍	7日	3回以内
		モスピラン顆粒水溶剤	3	2,000倍	前日	3回以内
	ネオニコチノイド剤	アクタラ顆粒水溶剤	4	2,000倍	7日	2回以内
		ダントツ水溶剤	4	2,000倍	前日	3回以内
		モスピラン顆粒水溶剤	4	2,000倍	前日	3回以内

※収穫前日数（表3、4も同じ）

※1：成虫発生初期、※2：成虫発生期

表3 クビアカツヤカミキリに登録のある殺虫剤（使用方法が樹幹散布のもの）

8/5更新 JPPネット 確認

作物名	農薬名	希釈倍数	使用基準※	使用回数
もも	アクセルフロアブル	100～200倍	前日	2回
	スミチオン乳剤	1,000倍	3日※ ¹	1回
すもも※	アクセルフロアブル	100～200倍	前日	2回

※すもも（日本すもも、プルーン）

※1：表2に同じ

表4 クビアカツヤカミキリに使用できる殺虫剤（樹幹に注入して使用するもの）

8/5更新 JPPネット 確認

作物名	農薬名	希釈倍数	使用基準※	使用回数
もも すもも※ うめ	ロビンフッド	食入孔にノズルを差し込み 噴射	被覆内容積 1 m ³ あたり 原液750～ 1500mL	5回

※すもも（日本すもも、プルーン）

○この秋の点検でクビアカツヤカミキリのものと思われるフラスの排出が認められた樹においては、次年度以降も発生の恐れがあるため、以下のように対応する。

- ・気温が低下して幼虫が活動を休止する前の、遅くとも 10 月までに、フラスを取り除き、食入孔に針金等を差し込んで、幼虫を刺殺する、あるいは食入孔から注入する薬剤や、樹幹散布する薬剤を用いて幼虫の駆除を行う。
- ・来年になったら、新しい成虫の羽化による拡散と新たな産卵を防止するため、6 月上旬までに、防虫ネット等を用いて新たに被覆を行う。

上記対策も含め、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構が作成したパンフレット「外来カミキリムシ総合対策マニュアル」

(URL:https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/175662.html)や国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所の「クビアカツヤカミキリの防除法」 ([URL:https://www.ffpri.go.jp/pubs/chukiseika/5th-chuukiseika12.html](https://www.ffpri.go.jp/pubs/chukiseika/5th-chuukiseika12.html)) が参照できる。

なお、本種は特定外来生物に指定されているため、生体の移動・持ち運びは固く禁じられている。



写真1 クビアカツヤカミキリの雌成虫



写真2 クビアカツヤカミキリの雄成虫



写真3 クビアカツヤカミキリのフラス



写真4 クビアカツヤカミキリの脱出孔

(問合せ先)

担 当	病虫害防除部
電 話	026-248-6471
ファクシミリ	026-248-6473
電子メール	bojo@pref.nagano.lg.jp